

RKM会報

Vol.16

2017年10月発行

編集・発行：RKM 幹事会事務局：桑水流正邦（くわするまさくに） 〒132-0035 東京都江戸川区平井 4-26-9 渡瀬方
メールアドレス：rkm634@rkm634.jp

平成 29 年度総会報告 (2017 年 6 月 7 日)

本年も日本教育会館(一ツ橋)にて18時30分から開催しました。出席者は36名でしたが、25期から新入会員である91期までが集まりました。91期8名のうち高橋和士君と高橋俊太君が出席してくれました。

総会の部は、この一年間に亡くなられた4名の会員および畑先生の奥様愛子さんのご冥福を祈り黙祷を捧げた後、新入会員の紹介、久我昭雄会長の挨拶で始まりました。

会長挨拶

今年はRKM創設90周年の節目であり、改めてOB会会則をお手元の資料に掲載しました。第2条の目的に「会員相互の親睦を図ること及び武蔵高等学校・中学校のバスケット部の現役が楽しく継続して活動し、卒業後に本会会員になるように支援すること」としておりますので、よろしくお願いします。また、



久我会長

次の頁に50年史の巻頭言にある初代会長三ツ本さんの巻頭言も掲載しました(添付資料参照)。私自身も全く同じ気持ちでこれまで先輩・同期・後輩と親しくしてきました。これからもこの心情を忘れずにいたいです。

100年誌作成に向けて幹事会も活動していきますので、皆様からの情報もお待ちしています。RKMとしてのつながりを感じられるように、いろいろな活動を大事にしていきますので、お力添えよろしくお願いします。

引続き、幹事会から、平成28年度活動報告、会計報告、監査報告、平成29年度活動計画、および現役支援金を含む剰余金処分案、予算案を報告し、承認を頂きました(詳細は同封資料をご覧ください)。

単年度黒字を目指した結果、会費収入は(過年度分の納入もありましたが)予算をクリアし、さらに皆様からのご寄付のおかげで、繰越金の減少を1万5千円程度に抑える

ことが出来ました。一方、アーカイブ活動等が低迷しているとの見方もあり、財政基盤をしっかり築くとともに、10年後に向けてやるべき事を一つ一つしっかり実行していきたいと決意表明しました。また、現役支援を心がけてはいるものの、単発であり継続的な支援が出来ていないことから、中学生コーチの指導力を高める工夫をしていきたいと締めくくりました。

懇親の部は、25期内野邦夫さんの乾杯で幕を開けました。

まず、昨年のインターハイ予選(対穎明館)のビデオを見ながら当時高3である91期を紹介してもらいました。また、今年の関東大会(対八王子実践、対都昭和)のビデオを見ながら78期木本コーチ、86期宇野コーチ



25 期内野さん

(89期阿部さんから引継ぎ)から現役を紹介してもらい



35期細谷さん、34期川浪さん、35期中山さん

ました。さらに、トレーナーによる指導やトレーニングルームを使用しての体力増強の模様を87期宮崎哲大さんから紹介してもらいました。

引続き、代々木イベントに参加して頂いた県立浦和高校のコーチである43期野辺勝さん(参考：浦高の校長は50期バレー部出身の杉山剛土さん)から「体格・体力



87 期宮崎さん



86 期宇野コーチ

に優る選手を集めるチームにはなかなか勝てないが、自分が教わった武蔵らしいバスケットを目指している。東大や筑波へ進学してバスケットを続けている選手もいる。是非武蔵と定期的に交流していきたい」とのお言葉を頂きました。

懇談が弾む中、この一年のRKM活動を写真で紹介しながら、今春のゴルフ会で優勝した31期東恭平さん、代々木イベントで司会進行を務めてくれた58期松本一郎さん、インターハイに出場した最後の高三世代となる45期増島篤さんからお言葉を頂きました。

その後、久我会長から木本コーチに現役支援金を贈呈（主にトレーナーへの謝礼に使われているとのこと）、最後に29期佐室有志さんから「この様な会をしっかりと続けてほしい、今日は参加者が少ないが、皆が声をかけあって参加するようにしよう」と締めのお言葉を頂き、集合写真を撮影して総会をお開きとしました。

これからも皆さんの活動状況を写真・動画で紹介させていただきますので、是非情報をお願いします。



新入会員（91期）紹介

後列左から、早瀬陽平（慶応大）、齋藤嗣文（名古屋大）、平井彰、古屋創。前列左から、佐藤悠樹、水谷健太、高橋和士（慶応大）、高橋俊太（東工大）。



第2回 代々木イベント報告（2017年3月31日 58期 松本一郎）

日本バスケットボール界の聖地、憧れのコートでプレーを楽しむとともに、一流選手たちが幾多の名勝負を繰り広げた同じ場所でプレーする機会を現役に提供しようという趣旨で、一昨年に引き続き開催されました。

当日は早朝から89期阿部さんらを中心に準備を行い、36期久我会長の開会挨拶に続いて、中高現役の招待試合、OB戦、現役との交流戦等を大いに楽しみました。中高現役、OBとそのご家族、招待試合の対戦相手（石神井西中、浦和高）、父兄等関係者等、総勢200名以上の参加を得て盛大なイベントとなりました。

現役はそれぞれ格上のチームと対戦する機会を得ましたが、「体格、運動能力に勝る相手に対し、頭脳、テクニックで対抗して勝利を得る」という武蔵らしい試合展開があまり見られないまま敗戦してしまったのはやや残念でした。バスケットボールの聖地でのプレー経験を活かして今後の公式戦での奮起を期待したいところです。

OBは、今回もコート上で元気な姿を見せて頂いた27期鹿子木さんを含む25～28期、黄金期を築いた29～33期、復活の礎を築いた34～38期、審判等いろいろとサポートして頂いた41期、まだまだ元気な43～46期、

本イベントを発案した結束固い47～49期、仕事を終えて続々と駆けつけてくれた80～90期台の若手の参加を得て卒業式を終えたばかりの91期まで含めると50名を超える賑わいとなりました。

生憎肌寒い天候だったことと年度末の平日開催ということもあり、働き盛りの50～70期台の参加がやや少なかったものの、現役、OBが互いに胸につけた名札を見せ合いながら交流し、RKMの伝統が受け継がれて行く貴重な機会となりました。また、32期印南さんが東京オリンピックの日本対ソ連戦を代々木第二体育館で観戦されたというお話、35期三矢さんが福井インターハイのパンフレットを持参されていたのが特に印象的でした。



(本会報 2017年3月号に掲載された48期福本淳一さんの中国武漢報告を読んで寄稿して頂きました)

昨年日本女子バスケットは久しぶりにアジア・チャンピオンとなった。長い間中国選手の長身の壁に阻まれ、どうしてもその牙城を崩せなかった。何しろ2m以上の長身選手を3人も要する中国に対し、最長193cmの渡嘉敷一人ではどうにも対抗しようがなかった。ところがその常識を覆す事態が起きた。昨年全日本女子 team の HC に就任した内海氏 (前 JX) が選手全員に徹底的な走り込みを要求、出場選手全員が40分間走り続ける (ダッシュ&ストップ) 事ができる team を創り上げた。試合開始直後からオールコートプレスで相手のパス廻しを攪乱し、インターセプトを狙い楽なシュートを打たせない。一旦 my ball となれば即5人全員がゴールに殺到する。ゴール付近でシュートやパスがブロックされるとみるや、後ろを振り返れば他の4人の選手がフォローランしてくる。そこでノーマークの選手にバックパスをすれば、イージーシュートが打てる。JX 時代の大神選手の得意プレーで、大神はゴール下を通り抜けた後でバックパスを放ち倒れこむ。内海コーチはこのプレーを選手全員に習慣づけ徹底した。概して大型選手は走り込みに慣れておらず、長身揃いの中国選手はこの日本選手に追いつけずノーマークシュートを許す。特に試合開始直後はこの攻撃が有効で、165cmの吉田、184cmの間宮、193cmの渡嘉敷を中心に日本選手がコート中を駆け廻り、アツという間にリードを広げる。また走り込みはリバウンド取りにも有効で、165cmの吉田選手のリバウンド数が多いのにもビックリする。まさに「走力が身長差を覆す」証左となった。また走り込みは身体強化にも有効で、従来膝に弱みがあるといわれた渡嘉敷が40分間走りぬく走力を身につけ、加えて3 point shoot の確率を高めたのも、内海コーチの指導力と本人の向上心の賜物であろう。試合は福本君の観戦記にあるように、出だしの大量リードに支えられ、中国相手に20点以上の差をつけ圧勝。まさに日本 team 会心の勝利となった。

そこで我等の畑バスケットである。S30年神戸インターハイで宿敵三条高に僅差で敗れ (29対31) 連覇を逃した我が校は大西、杉山両選手を中心とした新 team に移行したが、ここで畑先生は試合中 full time でオールコートプレスを続ける作戦を中心に据えた。これは team のメンバーの特長、即ち運動能力に優れたチビっ子集団 (失礼!) が充実し全員が走れることによる。乙幡・東・吉沢・三矢・平岡・小川等全校マラソン大会の上位常連が試合開始と共に走り廻りボールを追い、相手に自由な動きをさせない

defense で相手を責め続ける為、offence に余り時間をかけずフォーメーションプレーで easy shoot を狙う主眼点は zone defense の第一線3人で徹底的に相手を追い詰める。その為に32分間走り続ける走力と defense 力を強化する為にまことに激しい練習が続いた。何しろ練習中の3分休憩になると全員でコートの廻りを全力疾走することが求められる。始めはその猛練習を気楽に眺めていた我等ゴール下組も毎日の練習でついていかざるをえなくなり、やがてパスカットやリバウンド後の速攻の玉出しに慣れ team の得点力は飛躍的に向上した。

然し試合はキツかった!! 特に一線の3人の負担は甚大で、乙幡君の言によれば、試合開始直後から全力疾走で走り廻り3分位たつと目の前が真っ暗になり何も見えなくなる。もうダメだと思うと何故か time out になる。この40秒間で息を吹き返しまた走り廻る。とにかくきつかった。後年畑先生に聞くと3分経ったら time out に決めていた、限界点だったという。然しこの3分間で味方は大量リード、うろたえた相手からパスカット速攻の連続で10点以上のリードを奪うことが多く、試合を優位に進める事ができた。勿論早いテンポの試合運びで得点レベルは飛躍的に上がり、日本の高校男子バスケットはスピードと得点力で様変わりとなった。因みに S31-32年の武蔵連覇のインターハイ決勝のスコアは、S31鳥取インターハイ56対41、S32東京インターハイは74対49。いずれも楽勝であった。まさに畑先生が、当時の男子高校バスケットを創り変えたといえる。後年の能代高校が日本中の優秀選手を集め三連覇を達成したのも素晴らしいが、我々のような進学校の普通の生徒を束ね、インターハイ二連覇を達成したのはまさにミラクルであった。これは当時の現役だけの力ではなく、年々力をつけてきた武蔵バスケットの底力、即ち先輩方の努力・伝統の上に成り立っているのは勿論である。ここまで考えると、60年前の畑バスケットが再び全日本女子で内海 HC によってよみがえったと思え、嬉しくてならない。キーワードは「走り込み」。びたり一致する。共に結果を出した。

そこで Rio Olympic である。走り込みによって defense・速攻・リバウンドに力を強化し変身した日本女子バスケットが Olympic で世界強豪 team を相手にどう戦うのか、連日眠れぬ日を過ごすことになる。

一次予選を突破した日本は best 8 入りし、二次リーグで強豪 team と対戦する。世界2位のオーストラリア、同4位のフランス、9位のチェコ、世界12位の日本にとっていずれも難敵である。然し日本は力を発揮した。特に2戦

目のオーストラリアには3Q終了時に16点の大差をつけていた。日本 team の予想外のプレイ振りにオーストラリアはリズムを崩しまさかの苦戦。深夜観戦の私は一人“このゲームは勝った!!”と吠えた。ところが4Qに入ると流れは激変、Zone defense への変更で日本は攻撃の足を止められ、シュートが乱れた。豪は206cmの長身選手を中心にgoal下を支配し、offenceでも長身選手の柔らかなシュートで得点を重ね点差を縮小され、遂に逆転負けとなった。これを実力差といってしまえばそれまでかも知れぬが、まことに惜まれたゲームであった。4位のフランス戦も3Q 迄対等であったが4Qに押し込まれ、9位のチェコ戦も僅差で敗れ、2次リーグで4位となった。その結果準々決勝でアメリカと当り実力差で敗れたものの、内容は一方的なものではなく善戦といえる。日本は走力だけではなく渡嘉敷・間宮の大活躍、特に吉田のスピード・ゲーム構想力・個人技は間違いなく世界一流のレベルにある事を証拠だてた。然し世界は凄い。どの強豪 team にも2m 超えの選手がいてしかも大活躍。走れて柔らかな身体から放つ3ポイントシュートもよく入る。これもWNBAリーグで長身選手同士が切磋琢磨しレベルアップにつながっているのだろう。日本では2m 超えの選手の出現は難しいと思われるので、さてどうするか？おそらくシュートの際の catch & shoot の短縮化を目指す

のも一策であろう。現に米国女子のシュートの早さ、上手さはまさに男子並といえる。日本女子もシュート練習により時間を割くべきと思う。

4月、2020 Olympicに向けて新体制がスタートした。新任トム・ホーバスHC(旧JX)を迎え2年間の新team作りとなる。新旧HC共JX出身、また中心選手にもJXメンバーも多く路線の大きな変更はないと思うが、Rioで活躍したベテラン選手と今後育ってくる若手選手がうまく溶けあいメダルを取れるteamを作りあげていただけると大いに期待をしている。

3月末、RKMバスケットを見学する為に代々木体育館を訪れ、東京 Olympicを思い出した。S39年10月、この代々木体育館でバスケットの緒戦、日本対ソ連戦が行われた。私(24才)は勤務地北九州から夜行列車でかけつけ、このゲームを観戦した。227cmの最長身と172cmの最長身の選手が対決する場面もある印象深い試合であったが、いかんせんその実力差は比ぶべきも無かった(ロシア2位、日本10位)。

56年振りに日本で再度行われる Olympicで日本女子が世界の頂点にどこまで近づけるのか、興味はつきない。然し私はその時点で80才超え。果たしてこの眼でゲームを見られるか。

(2017年5月11日)

ホームカミングデイ報告 (2017年9月9日)

恒例の同窓会主催ホームカミングデイ(HCD)は今年も9月第二土曜日に開催されました。同窓会は、サークル等に参加していない卒業生向けイベントにも力を入れており、今年は「宇宙戦艦ヤマト」の主題歌で有名な35期佐々木功さんの講演会があり、例年より多くの卒業生・ご家族が参加されてました。RKMも例年より出足が早く、14時になると早速ベテランOBと中学生の交流試合のトスアップ。その後も、若手OBと高校生の熱戦もあり、16時頃まで交流試合に汗を流しました。16時からはこちらも恒例のフリースロー大会を行い、OBでは上位入賞常

連の力の衰えが目立つなか、ママさんバスケのコーチとして日頃から鍛えている新津さんが若手相手に見事三位に食い込みました。(敬称略)

中学優勝: 中2 高橋陽、二位: 中1 山川、三位: 中1 浅井
高校優勝: 高2 田中、二位: 高1 板橋、三位: 高1 村田
OB優勝: 86期宇野、二位: 78期木本、三位: 41期新津

OB 優勝者宇野さん



ベテラン OB 対中学生



27期 鹿子木さんのお話

出席者（敬称略）：27鹿子木、29川浪、35楠、36久我、29菊田、38竹林、41畑、41新津、41落、44吉永、47桑水流、

53時任、54山田、54長谷川、58松本、61桑田、78木本、86宇野、86中村、87守田、88清水、福本久雄先生

私たちの時代 80期 主体性を求めて

《現役当時のエピソード》

あれは高校2年生の春合宿。僕はいつも監督の山崎先生に怒られてばかりいた。個性が強いにも関わらず、プレーは控えめということが多く、「主体性が足りない」と言われていた。そのときの合宿でもいつもの合宿と同様に日中はハードに練習し、夜はOBのオールスターと試合であった。OB戦では、ヘロヘロの状態であることに加えて、OBの強さから毎回ポコポコにされていた。（あのときのOBは黄金時代の一つだったと思う）例のごとく、僕は



引退試合後

は十分なオールコートプレスをする事ができず、山崎監督に怒られていた。合宿初日の夜練でしこたま怒られたのち、2日目の午前練でも怒られ「そんな体たらくなら

帰ってしまえ」と言われてしまった。普通ならそれでも残って練習させてもらえるよう希望するだろう。でも僕らの代は違った。主力メンバーの宮崎と東はそのまま本当に帰ってしまい、キャプテンは途方に暮れ、山崎先生は呆れかえっていた。それは決してヘタレというわけではない。納得いかないことに何も考えずにそのまま流されるのではなく、僕らなりの「主体性」を示したのかもしれない。決して正しい主体性を示す方法ではなかったが、今となっては飲み会のネタの1つある。

《メンバーの近況》

80期は今年で高校卒業から11年。メンバー8名の近況を報告する。

津村遼は、大学ではバスケサークルのキャプテンを務め、大学院では抗体によるがん治療の研究で博士号を取得。

大久保智樹は、修士課程を終え、京都の精密機器メーカー勤務2年目。5年前には山崎先生の依頼を受け、白雉とバスケットボールを配したチームロゴをデザインし、中高体育館のセンターサークルを彩っている。

石原圭祐は、ボストンでの大学院生活を終え、2016年3月よりドレスデン(独)のマックスプランク研究所で神

経管という臓器の試験管内での再構成の研究を行っている。なぜか医学部の体育館の鍵を持っているグループと巡り合い、毎週日曜はバスケをしている。

幾瀬樹は、医学部卒業後、亀田総合病院での研修を終えたのち、新潟大学小児科に入局し、関連病院で働いている。

澤田佳宙は、大学卒業後、住商鋼管株式会社に就職。去年から福岡支店へ移動。2016年7月に結婚し、福岡での式には幾瀬と大久保が駆けつけた。澤田は結婚式冒頭から泣いていた。

東祐太朗は、大学卒業後、東京の大和総研勤務。会社のバスケ部がきっかけで知り合った女性と2014年5月に結婚。2017年8月にかわいい男の子の父となりイクメン修行中。

宮崎航は、大学在学中に起業し、ネット広告事業「ヒトクセ」を手がける社長として活躍中。

都留俊太郎は、台湾の農耕史の博士研究で台湾と京都を往復する生活。自身も稲作の農作業を楽しんでいる。

《主な戦績》

高3インターハイ予選は恐らくベスト64

私学戦の3Pコンテストで優勝数回

《チームの特徴》

3種類のプレスDFを駆使してパスカットを狙い、OF-DFの切り換えを早くして速攻を狙う、スピード狙いのプレー。たまには切れるやつもいたが、みんな熱いハートを持ってバスケットに向かっていった。東以外は身長が高くなかったため、東に頼っていた分が多く、東がファールアウトすることが多かった。部活のあとは3対3で遊びながら連携プレーをたくさん創りだした。試合は前半が苦手。

(80期 幾瀬 樹)



社会人になって

現役コーチからの報告

《78期 木本健一コーチ（武蔵数学科講師）》

今期の高校チームは高2：7名、高1：8名、中3：7名の計22名で活動しています。

『勝利へ貪欲に』をスローガンとして、キャプテン・渡辺、副キャプテン・田中のリードのもと『関東大会出場』を目標に、今年の6月より新チームがスタートしました。

他チームに比べて運動能力が劣る分、オフェンスではチーム全員でノーマークを作ること、ディフェンスでは1対1+ α を作る努力を続けて、自らチャンスを作り出すバスケットを目指します。

外部委託トレーナーの金井淳さんの指導のもと、月3回のトレーニング日を設定して体作りにも注力しています。

《86期 宇野宏泰コーチ（一橋大学大学院院国際企業戦略研究科助手）》

中学生は中2：5名、中1：12名の計17名です。中1はほぼ全員素人です。主力4人が怪我をしてしまい、この夏の区民大会、私学戦ともに予選敗退してしまいました。しかし、皆な真面目に練習に取り組んでいるので、長期的にはかなり期待できると感じています。現在は、1on1での個人技の基礎技術の強化、食事指導や筋トレを通しての体格強化を最大の目標に掲げ、副コーチの86期中村海と共に練習のメニューを作っています。選手間で能力の差が開き始めてしまっているので、いかにそれを埋めて全体のレベルを上げるか、という点が難しいです。秋の新人戦までにはフルコートでディフェンスできるように少しずつ教えていく予定です。

本会報で紹介している「リアルマドリード」での練習も少し試しましたが、やはり選手が（特に中1が）練習に慣れてしまうと、だんだんとダレてきてしまう、といった問題があり、どのように練習に取り入れていくか、今後も試しながら見ていこう、という方針で副コーチと話しています。

リアルマドリード流の選手育成哲学・方法

今年7月末にサッカーで有名なスペインのリアルマドリードの下部組織の一つであるバスケットボール部門の選手育成コーチが来日し、コーチ講習会を3日間と、選手用（U15）クリニックを3日間行いました。私は知人の関係で、その通訳をしました。ここでは、その時に学んだことの中で、日本の、そして武蔵の練習と、リアルマドリードの練習との根本的な考え方の違いを簡潔にまとめて報告します。

まず、ほぼ全ての練習の大前提の目標となることが、バスケットボールの基本的なプレー実行に至るまでのプロ

セスを鍛えることです。そのプロセスは、1) Perception（状況認識 / プレーのオプションの把握）2) Decision（状況認識に基づいた判断 / どのプレーをするかを選択）3) Performance（選択したプレーの実行 / 実際にプレー）となります。選手は試合中には、常にこの三つのサイクルを回し続けながら状況に適応しながらプレイすることが重要になります。「特に周りをよく見ない」や、「プレーを先に頭で決めてしまってからやってしまう」など、このサイクルに基づかないプレーをしてしまうと、状況変化に適応できず、ターンオーバーにつながってしまいます。

この能力を鍛える形式の練習というのが「グローバル」な練習です。練習したい特定の技術や動きを、実戦に近い状況の中で、周りの状況変化を認識、適応しながら使っていく練習です。多数の選手がコート内に入りみだれるような練習や、その場その場で変化していくシチュエーションをコーチが作り出してあげることで1対1のような単純な練習でも「グローバル」な練習に変えることができます。ミニバスの練習などでよく使われる「ドリブル鬼ごっこ」や「ドリブルドロケイ」などはこの種類の練習に入ります。単純な技術の練習ではないので、もちろん難易度は高くなります。

それと対照的な練習方法が「アナリティカル」な練習です。ディフェンスステップや、対面パス、スクエアパス、レイアップドリル、ツーメン、スリーメンなど、練習の中での動きがほぼ完全に型として決まっており、ある一定のスキルや動きを、周りの状況変化が乏しい状況の中で反復練習するのが「アナリティカル」な練習です。

日本の中高生のほとんどのチームでの大部分の練習がこの「アナリティカル」な練習に分類されるのでは無いかと思います。ちなみに教えていたコーチ自身も、選手時代はほとんど「アナリティカル」な練習が主流だったと言っていたので、バスケットの伝統的な練習方法はその主流が「アナリティカル」な練習なのかもしれません。リアルマドリードでは、いくら型の練習をしたところで、それを実戦で「どのように、いつ使うか」を判断させる練習にしない限り、実戦では役に立たない、と考えているそうです。よって、基本的なパス練やシュート練であっても、練習形式を常に“グローバル化”させて、状況把握能力と判断能力を鍛えさせるようメニューを考えるそうです。

その他には、日本の伝統的なスポーツ界で特に顕著な根性論に基づく「苦しい練習に耐え忍ぶ」やプレーの正確性を鍛えようとするあまり「ミスさせない」ことに重点を置きす



3対3

ぎてしまうのではなく、リアルマドリードでは「楽しく、激しく、学びのあるものに」という練習哲学が起用されているようです。これには練習が楽しければ、選手は自然と激しくプレーするので、運動量もタフさも罰無しで獲得できる、という理由が背後にあります。一回でもできないと罰則を課したり、怒鳴ったりする、というコーチングスタイルではなく、できるだけ練習中にたくさん失敗させ、考える機会を練習で選手のために作ってあげる。そのために、一人あたりの目的の練習回数が増えるような練習メニューを考える。そこから選手が自分で考えて修正、改善できるようにガイドする、というのがコーチの役割だと考えられています。

最後にもう一つだけ触れますが、コーチとしての役割の優先順位です。日本では、中学高校ともほとんどの学校で、コーチの主眼は「勝つチームを作る」ことだと思います。その結果、中学生で背が高いからといって、インサイドだけ練習させたり、背が低いからといってポストアップの練習をさせない、といったことがどのチームにもよくあるかと思います。それに対して、リアルマドリードの若手育成コーチにとって大事なものは、包括的な良い選手の育成です。選手が将来どのくらい大きくなるか、どのくらいの身体能力を身につけ、どんな

チームでプレーすることになるのかというのは、中学生や高校生といった時点ではなかなか分かりません。よって、コーチの役割は、一人ひとりの選手をいいプレーヤーに育てることであり、チームの勝利をその上に持つてくることによって、その選手の将来を狭めてはならない、という考え方を持っているようです。

この他にも細かい違いはまだ沢山ありますが、日本で主流のコーチングとは全く逆の練習哲学に基づいているなど、感慨深くなりました。当クリニックでは、南米強豪サッカークラブ、ボカジュニアーズの日本支部のコーチの方もいらつしやり、その方と少しお話しできたのですが、南米サッカーと日本サッカーのコーチングの方法も、ここで話したような点において大きく異なる、とのことでした。ラテンアメリカ系のコーチング哲学には、スポーツさえ違えども、類似点が多いのかもしれませんが。



OBとの5対5

現役公式戦試合結果

高校

新人戦 第4支部大会

2016年10月23日 武蔵高●68 - 91 都鷲宮

関東大会予選 Bブロック

2017年4月16日 武蔵高○62 - 58 八王子実践

2017年4月23日 武蔵高○90 - 61 都昭和

2017年4月29日 武蔵高○76 - 61 都深川

2017年4月29日 武蔵高●70 - 83 帝京

インターハイ予選 Bブロック

2017年5月14日 武蔵高●75 - 88 都大崎

中学

練馬区新人大会

2016年10月2日 武蔵中●42 - 72 光が丘第二

都春季大会予選 第三ブロック

2017年4月9日 武蔵中○100 - 20 天沼

2017年4月16日 武蔵中●29 - 54 光が丘第二
練馬区総合体育大会

2017年6月11日 武蔵中●48 - 51 早大学院中

関東大会を支援！

平成29年6月3日～4日に東京体育館にて開催された第71回関東高等学校男子バスケットボール選手権大会を支援するため、高校中学とともに、プログラムに賛助広告を掲載しました。

東京勢はA B各ブロックに4校ずつ参加しましたが、実践学園と國學院大學久我山が各2勝したのが最高でした。優勝はAブロック・船橋市立船橋、Bブロック・日本体育大学柏でした。

祝 関東大会

武蔵高等学校中学校 バスケットボール部 OB会



武蔵高等学校中学校
バスケットボール部

祝

関東大会

畑先生墓参り (2017年6月25日 29期 大塚弘介)

故・畑龍雄先生のRKM有志によるお墓参りに29期(HGC)を代表して行って参りました。佐久平駅まで畑正木君が迎えに来てくれました。車で20分位の、大変立派な正安寺(曹洞宗)というお寺の墓地でした。東京を出るときには雨でしたが、現地に着くと薄日がさしていました。これも先生がお導きになられたような気がしました。

私にとっては3度目のお墓参りです。今回も雑草や落葉がきれいに掃除され、墓石もきれいに磨かれていて驚きまし

た。聞く話によると、47、48、49期の有志の皆さんが中心になって前日から来て掃除をして下さったそうです。



写真の様な畑先生のご尊顔がプリントされたお揃いのTシャツを着て迎えてくれたのにはびっくりしました。天国の先生もさぞお喜びのことでしょう。



思えば昭和29年に先生の念願であったの高体連の夏の大会(秋田)に完全優勝した僕ら29期生が練習中から合言葉にしていた「へばったらがんばれ」が、墓誌の左脇に刻まれ、伝承されていることに驚きと嬉しさを禁じ得ませんでした。

先生の最愛の奥様「愛子さん」も本年4月に旅立たれ、既にここに御一緒に埋葬されていると、墓誌に書かれておりました。

謹んで御両人の御冥福を御祈り致します。 合掌

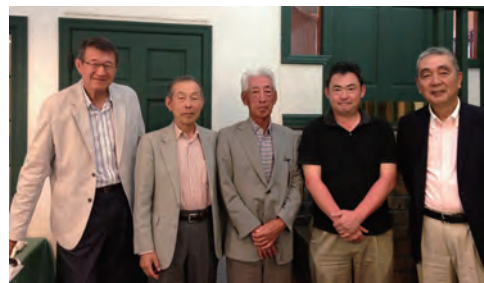
RKMゴルフ会のお知らせ (幹事 36期 鹿子木雅)

2017年春の大会は、五月晴れの中5月24日(水)にブリック&ウッドクラブ(千葉県市原市)にて開催されました。このゴルフ場は英米式の簡素な運営で18ホールスルーで、プレー費も東京・品川からの送迎バスも安価でした。

結果は優勝：東恭平さん(31期)、準優勝：松本一郎さん(58期)、三位：川浪茂男さん(29期)、ベスグロ：丸瀬宣雄さん(34期)でした。東さんは常に安定したス

コアで、ペリア方式でも常に上位に食い込んでいますが、優勝は久し振りだったそうです。

次回秋季ゴルフ会は2017年11月15日(水)に嵐山カントリークラブ(埼玉県嵐山町)にて開催予定です。



左から 鹿子木さん、川浪さん、東さん、松本さん、丸瀬さん



スタート前 23名全員で



鹿子木幹事からの成績発表

【物故者】

2017年3月以降に訃報を受けた方々です。謹んでお悔やみ申し上げます。

65期 中森 啓太郎 様 2017年4月28日

畑先生奥様 畑 愛子 様 2017年4月27日

編集後記

- ・印南先輩の観戦記、宇野コーチの報告、いずれも大変興味深い内容でした。(61期・桑田)
- ・これからも会報とHPを活用してどんどん情報発信していきます。(47期・桑水流)

<http://rkm634-jp.sakura.ne.jp/>